

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学部 理学療法学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
総合的 教育 の 基 盤	生命のしくみ	生物は、動物と植物に大別されるが、その生命活動の仕組みの違いを知ることが生体機構を理解する基本となる。本科目では、まず生体の最小単位である細胞について学び、次いで組織、器官の構造とはたらきを解説する。学生がヒトの身体の仕組みを知るための基礎について理解を深め、多様な生体現象を科学的に考察する能力を涵養することを目標とする。	高等学校での学習歴によってクラス編成を行う。
	物質と自然のしくみ	人類は、古来より自然の現象に興味を持ち、探求することによって自然現象を支配していると考えられる原理を導いてきた。さらに、その原理から導かれるであろう現象を予想し、確かめることによって自然科学を育ててきた。そのなかでも物理学は最も基本となる分野であり、21世紀の今日広い範囲の物理的な現象に対して精度の高い予測が可能になった。 現在、われわれの日常生活のあらゆる場面において利用する器具や機械には、物理学によって確立された原理を用いているものが数多く存在する。しかし、それらは少数の物理学の基本原理を応用したものであり、その概要を理解させる。	高等学校での学習歴によってクラス編成を行う。
	生命の化学	生命体は、様々な化学物質の集合体であり、非常に巧妙な仕組みで生命維持活動を行っている。それら生体物質がどのような性質を持っているのかを学習することは、医療を学ぶものにとって重要なことである。そこで、生命現象にかかわっている物質について原子レベルから分子レベルまで理解を深める必要がある。本科目では、どのような法則で生体が形作られ、生きていくためにはどのような化学変化が行われ、生体機能と関係しているのかを習得してもらう。	高等学校での学習歴によってクラス編成を行う。

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
総合教育科目	情報科学	<p>現代の社会には、おびただしい数の情報が流れているが、その中で生活し働くものとして、能率よく必要かつ有用な情報を入手し、それらを整理し、分析する能力を身につけることは大切なことである。また、仕事の上で文章やレポートを作成したり、提示しなければならない機会も増え、情報処理能力を養うことがますます重要になっている。</p> <p>今日、インターネットは、家庭にも広く普及し始めているが、本科目では、コンピュータの原理からはじめて、文章・画像情報処理、データベース、ネットワークの技術を身につけることを目指す。</p>	
	生命倫理	<p>医の東西を問わず、古くから倫理的問題に関心が寄せられ、ヒポクラテスの誓文や中国古典の『傷寒論』などに厳しく取り上げられている。しかし、医学の技術と知識が進歩するにつれて、医療倫理に次々と新しい問題が提起され、医療の問題は解決されても、人間的・社会的価値を基準に倫理的判断と両立しないことが多い。</p> <p>科学技術の発達によりもたらされた成果は、直接人間の幸福につながるものではなく、厳しい選別が必要である。それだけに、医療倫理は、医療従事者だけではなく、患者家族を含めて広く一般の人々にも理解されなければならない。本科目では、医療倫理の考え方と、具体的な医療問題をとりあげる。</p>	
	心と身体の健康	<p>「こころ」と「からだ」をつなぐキーコンセプトを精神医学的観点から解き明かし、一般臨床場面で出会うことの多いケースを中心に、精神・身体疾患の患者が呈する精神症状や心の問題への対処法などを実際例をあげて解説する。基本的には、コンサルテーション・リエゾン精神医学の歴史と概念や科学的基盤としての精神免疫学的アプローチ（精神・免疫・内分泌相関）について学び、こころと体の関係の仕組みを理解し、患者の治療、さらには健康増進や病気の予防への応用を考える。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
総合教養科目	環境と健康	<p>近代科学技術の著しい進歩は、私達に豊かで便利な生活をもたらしたが、同時に人間を含め地球を構成するあらゆる物質系のアンバランスをもたらした。すなわち、大気汚染、水質汚濁など人間をとりまく環境の悪化である。さらに世界的人口の増加、土地の乱開発なども加わって、環境破壊は地域的なものから酸性雨、オゾン層の破壊、地球の温暖化、環境汚染など地球規模のものに拡大してきた。一方で、人類の宇宙への挑戦により宇宙環境 μG への適応が新しく問題となっている。このような環境変化が健康にもたらす影響を正しく認識し、生命を守る上で如何に対処していくかを、環境学的・地球科学的な視野から考察する。</p>	
	東洋医学と西洋医学	<p>東洋医学は主として古代中国で発達し、日本に渡って独自の発展を遂げ、現在のわが国の漢方医学、鍼灸医学として脈々と受け継がれている。一方、西洋医学は古代ギリシャのヒポクラテスに始まったが、大きく変わったのはウィルヒョウの細胞病理学説（1858）であろう。東洋医学は人体を小宇宙である（天人相応）と考えたが、西洋医学は全く別の見方をした。すなわち、細胞の集まりであると考えたのである。講義では、こうした2つの医学の基本的な考え方について理解を深めることを目的とし、さらに、東洋医学と西洋医学が統合された医療はどうあるべきかについて、現在までの国内外の例を紹介しながら考える。</p>	
	生薬の科学	<p>生薬、特に植物性生薬は、大地からの贈り物である。生薬を学ぶことは、人間の健康保持に必要な自然の恵みと生活文化の関わり合いを知るためには必要である。健康意識の高まりと共に「自然」なもの（生薬）による健康法が注目されてきている。そこで、生活の知恵として使われてきた民間薬、伝承薬も含め、よく知られている生薬について正しい知識（有効成分、有効部位）と、その知識に基づいた利用法を紹介する。また、身近（家庭）にある生薬の意外な利用法についても概説する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
総合教と育科活目	スポーツと健康	<p>現代社会の発達、快適な生活を私たちに与えてくれている反面、オーバーストレスや運動不足を引き起こし、生活習慣病の誘因となる。本科目では、初めにこれらの成り立ちについて学んだのち、腰痛、高血圧、肥満などの成り立ちとスポーツとの関わりについての知識を身につける。最後にスポーツはその実践方法によっては身体に悪影響をおよぼすことから、加齢とトレーナビリティ、スポーツ障害などを学び、さらに基礎的な応急処置の理論を習得する。</p>	
	生涯スポーツ	<p>慢性的な運動不足は身体にゆがみを引き起こし、様々な疾病の原因となることが知られている。生涯スポーツでは、特に肩こり、腰痛、肥満、高血圧、生活習慣病などの予防・改善に有効なスポーツ・運動であるストレッチング、腰痛体操、ジョギング、ウォーキングを実践する。また、患者や高齢者を含めた地域の人々とのコミュニケーションをとる手段の一つともなるニュースポーツ（たとえばゲートボール、グラウンドゴルフ、ペタンク）の指導法を含めた知識と技能を学ぶ。</p>	
	生涯スポーツ	<p>健康や体力の維持増進は、人生をより良く過ごす上で重要な問題である。しかし、今日の日常生活では、身体活動の機会は減少し、体力の低下を招いている。生涯スポーツでは、生涯スポーツにひきつづき、日常において手軽にでき、生涯を通じて行えるスポーツ（ゴルフ、テニス、水泳、スキー）の実践を通して、良好なコンディショニングを維持する知識と技能を学ぶとともにスポーツの楽しみ方を身につける。</p>	
	スポーツ社会学	<p>スポーツは文化活動の一端であるにも関わらず、各種国内・国際大会ではその枠組みを超えたような取り組みが成されていることもある。本講義は、スポーツの起源やそれを取り巻く文化、行政政策上のスポーツ振興や地域スポーツの取り組み、国家事業としてのスポーツ、更にはスポーツ組織の運営やスポーツ事業の計画・評価などのスポーツを取り巻く社会や文化について学習するものである。これらを学習することで、各国のスポーツ文化、そしてそれらを取り巻く職業</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
総合人間教育と育生科活 目		<p>としてのアスレティックトレーナー像を相対的に捉えられるようになることを目標とする。</p>	
	スポーツコーチング論	<p>プレーヤーの競技力を向上させるためにはスポーツ科学に基づいたトレーニング理論やプログラミング・コーチングが必要である。本講義では特にコーチング論に焦点を当て、指導者の役割、指導者の心構えや視点、競技者育成プログラムの理念や指導計画、選手との望ましい関係、ミーティング方法論、ITの活用、チームマネジメントなどについて学習する。アスレティックトレーナーも例外なく指導者であり、本講義を受講することで指導者の理念や計画性を理解し、理論的な思考を構築できるようになることを目標とする。</p>	
	アスレティックトレーナー概論	<p>アスレティックトレーナーの仕事は、様々な職業の職域と重なるところが少なくない。ここでは、特に必要となるであろう医学的知識を主として学ぶ。本講義は、救急処置やアスリートの健康管理、内科的障害と対策、外傷・傷害と対策、リハビリテーション・トレーニングのプログラム、コンディショニング、特殊環境下での対応、アンチドーピングなどを学ぶと共に、コメディカル職としてこれらの知識をどのように応用することができるか考えさせる。また本講義は、次年度以降更に細分化し専門的に学習することになるため、基礎的な考え方を身につけさせることを目標とする。</p>	
	アスレティックトレーナー概論	<p>アスレティックトレーナーの仕事は、様々な職業の職域と重なるところが少なくない。ここでは、スポーツ現場における心理学や指導者が背負う社会的・法的責任を主として学ぶ。本講義はスポーツと心理、動機づけ、コーチングの心理、メンタルマネジメント、指導者のメンタルマネジメント、スポーツ事故による指導者の法的責任、スポーツと人権などを講義すると共に、コメディカル職としてこれらの知識をどのように応用することができるか考えさせる。また本講義は、次年度以降更に細分化し専門的に学習することになるため、基礎的な考え方を身につけさせることを目標とする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
総合教育科目	人間と生活 アスレティックトレーナーの役割	スポーツの現場では様々な職種の間が携わっているが、その中でも特にアスレティックトレーナーの役割について講義を行う。世界各国のアスレティックトレーナーの起源や歴史的背景、選手を取り巻くサポートスタッフとの連携、組織運営と管理、倫理規定などを学習することにより、アスレティックトレーナーが担うべき任務や役割・業務について理解を深めることを目的とする。	
	言語とコミュニケーション 英語表現法	今日、国際化が進む中、「英語を話す能力」を獲得する必要性は、高まる一方である。しかし、英語を話すことは、伝えたい内容をまず日本語で考え、それを対応する英語に置き換えることではない。日本語的発想ではなく、英語的な発想によって表現しなくては、相手に英語で正確に気持ちを伝えることはできない。 そこで、本科目においては、英語に対する感覚を磨き、英語らしい英語を話す能力を高めていくことを目的とする。 まず各種の視聴覚教材を活用して、自然な英語表現の耳からのインプットを図り、英語的な発想による様々な表現方法を学ぶ。	
	英語表現法	アメリカ、イギリスを初め、世界各国から英語によって発信される情報に触れる機会が格段に増えた今日、英語の情報をキャッチし理解する能力は不可欠のものとなった。その情報には、目と耳から入ってくる情報と、活字やインターネットなど、文字を通して入ってくる情報の二種類があるが、その両方を把握する能力が必要なことは言うまでもない。 本科目では、その内の文字による情報を、できる限り速く、的確に理解する能力を養うことを目的とする。	
	英語表現法	英語を学ぶものにとっての最終目標は、英語で意見交換ができるようになることではないだろうか。おぼえた表現を使って相手に応答するのではなく、相手の意見に対し、賛成、反対を明確に示して自分の意見を英語で自由に述べられてこそ、真の“the international communicator”と言えよう。本科目では、その目標に向かって、「英語で自分の意見を言う」ための種々の訓練を行う。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
総 合 教 育 科 目	国語表現法	<p>日本で生活するかぎり、伝達の大半は、日本語を使用することによって成立する。従って、生活のあらゆる場面で日本語の的確な表現力と文章力を身につけていることが要求される。本科目では、よりよい言語表現を実現するため、その表現媒体である日本語についての知識を深め、興味を喚起することを第一の目的としている。普段なにげなく使っている日本語について意識的に考えさせることは、学生の表現能力や文章能力の向上につながっていく。</p>	
	中国語	<p>日本と中国の交流の歴史は古く、中国語の習得は、中国を理解する上で役立つばかりでなく、日本の文化や言語についての認識を深めるためにも有効である。そのために、まず四声（イントネーション）や拼音（ピンイン）といった発音や表記法の初歩を習得した後、日常会話や簡単な作文ができるよう、中国語の基礎を指導する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	人体の構造	<p>本科目では、医療系基礎科目の基盤として位置づけられる人体の構造に関する形態学的知識の習得を目指し、主に系統解剖学の立場から人体を構成する器官系の構造と機能を取り扱った講義を行う。また、講義では肉眼解剖学の内容のみならず、近年発展の著しい細胞組織学あるいは分子生物学による顕微解剖学的知見についても触れ、人体をミクロからマクロの視野で総合的に理解するために要求される科学的思考の基礎を養うことを目的とする。</p>	
	人体の構造と機能	<p>本科目では、人体の構造 で学習した内容を強化発展させる目的で、人体を系統解剖学の他に体表解剖学、局所解剖学の立場から論じ、将来、理学療法士として臨床で重視される人体の構造に対する知識に関し多角的なアプローチを加えた学習を行うことを目的とする。特に体表解剖学の内容では、全身の骨格系と筋の付着、走行などの位置関係について取り扱うことにより、運動器系を中心とする人体機能の理解をさらに深めることを目標とする。</p>	
	人体の構造実習	<p>人体の構造を機能形態学的に理解するには、肉眼的、顕微鏡学的、分子生物学的知識を総合的に学習することが重要である。本科目では人体模型、骨模型などを用いた実習作業から人体の構造 ・ で学習した人体各部の肉眼的構造の三次元的理解を深め、また、人体を構成する各臓器および細胞、組織について顕微鏡標本による観察実習を行い、人体の生理機能との関連などを総合的にとらえる力を涵養する。さらに、実物骨標本における立体構造や個体差などの観察を通して、理学療法士としての臨床へ発展させる知識の習得に努める。</p>	
	人体の機能	<p>人体の機能（ ・ ）は、万人に共通する身体の仕組みについて講義する科目である。一般に、「生理学(Physiology)」と呼ばれているこの学問は、基礎医学のなかでも特に重要な科目の一つで、あらゆる西洋医学のベースとなる領域である。理学療法士においてもその重要性にかわりはない。「生</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 の 構造 と 機能 育 及 び 心 身 の 発 達		理学」は、神経系・運動器系・感覚器系を中心とする動物性機能と、それ以外の植物性機能に大別することができる。人体の機能 では、このうち動物性機能について講義を進める。	
	人体の機能	「人体の機能」の授業科目の概要で紹介したように、一般に人体の機能は動物性機能と植物性機能に分類することができる。植物性機能は、循環器系、呼吸器系、消化器系、排泄器系、生殖器系、内分泌系の機能を意味する。人体の機能 に引き続き、人体の機能 では、これらの植物性機能について講義を進める。	
	人体の機能実習	人体の機能 ・ の理解をさらに深めるため、いくつかの生理学の項目について実習を行う。この実習では、学生を少人数のグループに分け、可能な限り実践的な実習になるように企画している。学生には自主性を持って実習に参加するように指導し、各項目毎にレポートの提出を義務づける。実習の項目は以下の通りである。 生理学実習装置の理解とその操作方法 心電図の測定と三角図法 カエルの筋と神経 血液型の判定とヘマトクリット値 呼吸運動と肺気量分画 脳波 筋電図 - M波とH波 - 皮膚感覚 血圧の測定とその調節機構	
	基礎運動学	「人体の構造」「人体の機能」の知識を基礎として、上肢、頸部、体幹の各関節運動における筋・神経機能を理解する。まず筋収縮によって起こる関節運動のメカニズムについて学び、さらに骨の形状や靭帯の走行など各関節の機能的な特徴を把握しながら正常な関節ではそれぞれどの方向への運動が可能なのかを理解して行く。さらにそれぞれの関節運動が、人体に多数存在する筋のうちどの筋の働きによって出現するのか、またその筋がどの神経の支配をうけているのか等についても十分な知識を得る。これらの内容は次年度以降に開講される評価学、検査測定学、運動療法学など、理学療法学における様々な専門分野に関連する重要な学問であり深い理解を得られるように進めて行く。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	基礎運動学	<p>「人体の構造」「人体の機能」の知識を基礎として、下肢の各関節運動における筋・神経機能を理解する。また、本学が推奨する「トップダウン」の理学療法評価法においては優れた動作観察能力と動作分析能力が必要であることから、日常生活動作における「正常動作」の理解に視点を置いた講義を展開する。特に理学療法の治療対象となる立ち上がり動作、歩行動作などの基本動作に着目し、それぞれ正常動作に必要な関節運動と筋・神経機能との関わりについて講義する。これらの知識は評価学総論、評価学実習ならびに臨床実習のなかで患者様の動作を分析する上での基礎知識として重要となる。</p>	
	基礎運動学実習	<p>運動学、で習得した内容を、様々な研究機器を用いて科学的に検証する。具体的には、臨床において理学療法の対象となる「基本動作」を構成する関節運動、また各動作の開始姿勢となる立位や座位などを題材として取り上げ、筋電図、重心動揺計、三次元動作解析装置などを用いて様々な視点から客観的な分析を行う。またこの実習の中で用いる研究機材に関して、その使用目的や使用方法について一通りの理解を得られることも目的となる。これにより今後臨床において生じる様々な疑問を自ら解決するために必要不可欠となる臨床研究能力の基礎を身につけ、4年次の理学療法研究法および卒後の研究活動に応用させて行く。</p>	
	人間発達学	<p>人間の発達過程を理解することは、中枢神経疾患、とりわけ脳性麻痺の理学療法をおこなう上で重要である。本科目では、受精から成人までの発達を、主に新生児期、乳幼児期、学童期、思春期の運動・身体面、知能・精神面、行動・社会面の特徴を講義する。特に、理学療法士に必要な運動・身体面の発達では、単に運動が可能となる月年齢を理解するだけでなく、運動が可能となる理由も含めて理解させることを目的とする。また、正常運動発達に必要な反射・反応も理解するなかで、運動との関連性もあわせて講義する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 の 成 り 立 ち 及 び 回 復 過 程 の 促 進	医学概論	さまざまな時代、地域において、病気の本質や原因がどのようなものとして捉えられてきたか、また病気にどう対応してきたかを概観することによって、現代医療の長所と短所を考察し、将来の医療の姿を探っていく。基本的に、医学史と現代の医療問題を取り扱うが、学生自身の病気体験や看護体験から生まれた問題意識なども取り入れながら、医療従事者としての人間形成にも役立つ講義を目指す。さらに、身体の物質的分析だけでは把握しきれない人間存在についての認識を深めさせていく。	
	衛生・公衆衛生学	衛生・公衆衛生学は、健康の科学である。日本の社会は、今や経済成長率の鈍化、産業構造の高度化、人口の老齢化、社会の複雑化などに伴い、病気や死因の構造も変化し、人々が保健医療に期待することがらも変わってきている。人々の健康増進にかかわる医療従事者として、健康づくりやプライマリケア等、保健医療の資源と人々とを結びつける仕組みを理解する必要がある。そこで医療に携わる者の常識として知っておくべき項目、衛生学・公衆衛生学の意義 健康の概要 健康管理と衛生行政 老人対策 医療行政と医療保障 環境衛生(自然と人工環境)について講義する。	
	衛生・公衆衛生学	衛生学は、個人を対象とし、公衆衛生学は、社会を対象とした、人々の健康保持、増進のための実際的な活動を考える学問である。今日、多様化、複雑化する日本社会の変化と地球規模での環境変化が様々な要因として、人々の健康を脅かすようになってきた。医療人として、これら現状を理解し、人々の健康増進に如何に寄与できるかを考えさせる。本科目では、予防に重点を置いて、予防衛生統計 環境の衛生 食品の衛生 産業保健 母子衛生 精神衛生 感染症の予防と治療 消毒方法の種類と応用 生活習慣病等を『国民衛生の動向』を参考に講義を進める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	病因・病態学	生体において、疾病がどのような原因により発生し、また、どのように病的変化が形成されていくかということを知ることが、その疾病の本質を理解する上できわめて重要なことである。本科目では、病因、発生機序、経過・予後など、疾病に関する基本的理解をはかることを目的として、疾病病変に共通する代謝異常、退行性病変、進行性病変、循環障害などを取り上げていく。	
	病因・病態学	生体において、疾病がどのような原因により発生し、また、どのように病的変化が形成されていくかということを知ることが、その疾病の本質を理解する上できわめて重要なことである。病因・病態学では、病因・病態学にひきつづき、腫瘍、アレルギー、免疫異常、遺伝性疾患、先天異常などを中心に取り上げていく。	
	免疫学	人間の体には、細菌やウイルスなどの外敵から身を守る防御機構があるが、この防御機構のうち、最も重要で大きな役割を果たしているのが免疫反応である。しかも、この免疫反応は、外敵だけでなく、体内に出現する変異した細胞、すなわち癌細胞を排除するという働きも担っている。さらに、このような免疫反応も、ときによってはアレルギーや自己免疫といった疾患を引き起こすという側面も持っている。本科目では、難解で複雑といわれている免疫機構をできうる限り易しく解説し、免疫反応の基本が理解できるようにする。	
	内科診断学	内科診断学では、医療面接技術 代表的な症候や症状病態を把握するために必要な基本的身体診察手技 補助検査について講義する。そうした知識を身につけることにより症候や症状から診断に至る過程について理解し、患者の病態の全体像を把握し、正確な判断が行える能力を養うことを目標とする。補助検査については、血液検査 組織学的検査 心電図、筋電図、呼吸機能検査などの生理学的検査 心エコー、腹部エコー、CT、MRI などの画像検査 内視鏡検査などについて解説を行い、必要に応じて医師と適切に連携できる人材の養成を目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教養科目	内科各論	<p>分子生物学や検査法の進歩により内科疾患の各分野においても病因・病態の解明が急速に進んでいる。そのため、個々の疾患における病因・病態の理解は、患者の全体像を把握するためにも重要である。本科目においては、内科診断法で学習した知識を基に、内科系各分野（内分泌・代謝疾患、呼吸器疾患、循環器疾患、血液疾患、感染症、膠原病・アレルギー疾患、消化器疾患、腎尿路疾患）における病因・病態・診断法・治療法について最新の知識を習得することを目的とする。</p>	
	外科診断学	<p>本科目では、外科系の科目に特有な診断知識・技術について講義する。理学療法で遭遇する機会が多い整形外科的疾患あるいは脳神経、循環器、消化器、腎泌尿器疾患で手術適応となる病態に特有な症候・症状、身体診察技術、補助検査、臨床的所見の記載の仕方などについての知識の習得を目標とする。特に、手術を含め比較的緊急に治療を要する患者に対して漫然と理学療法を継続することのないように、病態を的確に判断出来る理学療法士の育成を目指す。</p>	
	外科各論	<p>本科目では、手術治療の基本となる術前管理、麻酔、手術手技、術後管理、外科的な輸液、栄養法などについての知識を修得した上で、外科的治療法が必要とされる脳神経、循環器、消化器、運動器、泌尿器領域の主要な疾患の診断、検査、手術療法についての講義を行う。また、各科の代表的な疾患について実際どのような手術が行われているか、手術の適応と禁忌はどのように決定されるか、などについての理解を深めるとともに、最近普及してきている内視鏡手術、腹腔鏡下手術、血管内手術などの新しい手術療法についても解説を加える。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門の成り立ち及び回復過程の促進	整形外科学	<p>社会の高齢化やスポーツ人口の増加により、理学療法の適応となることが多い運動器の傷害・疾病は、増加するとともに、多様化している。この科目では、整形外科の基礎知識と最新の治療方法が理解できることを目的として、病理解剖学や病態生理学に始まり診断学（補助診断法を含む）、治療学などを以下の項目にそって解説する。</p> <p>【総論】</p> <p>(1) 概説、(2) 診断学、(3) 治療学、(4) 外傷一般、(5) 腫瘍一般</p> <p>【各論】</p> <p>(1) 肩関節・上腕、(2) 肘関節・前腕、(3) 手関節・手(4) 骨盤・大腿、(5) 膝関節、(6) 足関節・足、(7) 頸椎、(8) 胸腰椎、(9) その他</p>	
	神経内科学	<p>神経内科学は、内科学の中でも中枢神経（脳、脊髄）、末梢神経、筋疾患について診断、治療する学問である。本科目では、神経疾患における主要症候、補助検査などについて解説した後、理学療法士が日常臨床で遭遇する可能性の強い神経疾患を中心に病因、病態、診断、治療について講義する。</p> <p>神経内科学は本来症候学が中心であるが、最先端の高度な機器による検査よりも身体診察が重要視される。つまり、目の前の患者から自分で情報を引き出し、それを分析して科学的に考える習慣が重要である。本科目では、個々の神経疾患に対する知識の習得に加えて、そうした習慣を身につけることを目標とする。</p>	
	臨床心理学概論	<p>臨床心理学は、悩みや問題のある行動を患者自身が解決していく力を引き出すための学問であるが、その理論と経験則に基づいた知識は、身体症状を扱う治療場面でも応用できる。本科目では、医療従事者と患者の関係性という視座から、臨床場面での様々な現象を考えていく。特に心の葛藤や不安、援助関係、病者の内面世界などの具体例に言及することで、今後学生が患者に接した時、人間的な幅広い治療活動ができるような自覚を促していく。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	心身医学	<p>心身症とは「身体疾患の中で、その発症や経過に心理・社会的因子が密接に関与し、器質的ないし機能的障害が認められる病態」である。現代生活は、職場、学校、家庭などあらゆる場面で様々なストレスを生じ、人々に胃痛、下痢、頭痛や腰痛など身体症状を生じさせ、ときに高血圧や糖尿病などで症状の悪化をもたらすことが、広く認識されるようになった。このような状況の中で、心身症の原因、治療・予後・生活へのアドバイス、家族や周囲の人の対処法、更に、診断上間違いやすい病気などについて、正しい理解を深める。</p>	
	加齢医学（老年医学）	<p>現在、日本人の平均寿命は、約 80 歳で世界の最高水準に達している。その結果、我が国における高齢者人口は増加し、それに伴い老年期認知症、骨粗鬆症などの高齢者に多くみられる疾患と高血圧症や糖尿病などの生活習慣病の増加がみられる。また、高齢者では、若年者と異なり加齢に伴う特殊な病態がみられるため、その理解が重要である。そこで本科目は、加齢に伴う肉体的、精神的変化ならびに高齢者特有の病態や疾患を理解し、高齢の患者に対して日常生活における活動性の改善などについて適切な指導、助言が行える理学療法士の養成を目的とする。</p>	
過程の促進	小児・産婦人科学	<p>本科目では、小児期における成長発達と病気のかかわりを中心とする小児科学と生殖・妊娠や婦人固有の病気に関する産婦人科学により構成する。</p> <p>【小児科学】担当：石井 侃（8回）</p> <p>小児科学は小児を対象とした保健、治療の分野である。成長と発育により運動機能、知的能力が変化するため、それに応じた対応をしていく必要がある。また、成人では臓器ごとに各専門科にわかれているが、小児科ではそれらをすべて扱わねばならないため、幅広い知識が必要となる。第3の特徴としては、成人に対する医学は主に治療医学であるが、小児科学は治療よりもむしろ保健・予防が重要である。こうした小児科学の特徴を踏まえつつ、理学療法士に必要な小児科および成長発育の知識の修得を目的とする。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目		<p>【産婦人科学】担当：横田栄夫（8回）</p> <p>本科目では、婦人科疾患だけではなく、女性の生殖機能の基本的な概念についての理解を深める。排卵や月経がどのようにして起こるのか、周期的に分泌される卵巣ホルモンにより女性のからだにどんな変化が起こるのか、さらに妊娠時のホルモン環境などについて学ぶ。</p>	
	皮膚科・感覚機能医学	<p>本科目では、身体の異常所見を見いだす上で、有効である皮膚をはじめとする各感覚器官についての知識を修得することを目的とする。</p> <p>【皮膚科学】担当：松中成浩（8回）</p> <p>皮膚は、新生児期より老年期に至るまでの生理的变化と共に、自覚的にも他覚的にも早期からの病的異常所見があらわれる。医療従事者として患者に接する際に、その病変を把握する技術が必要とされるため、皮膚科的な知識は、きわめて重要である。ここでは、理学療法士が知っておかねばならない皮膚疾患にポイントを絞って講義を進める。</p> <p>【感覚機能医学】担当：保富宗城（8回）</p> <p>本科目では、嗅覚器、視覚器、聴覚器、平衡覚器、味覚器などの眼科・耳鼻咽喉科領域における各感覚器の機能異常ならびに疾患を取り扱い、その原因、検査法、治療法について系統的に理解できるよう指導する。</p>	オムニバス方式
	麻酔蘇生学	<p>麻酔科学は、手術時の麻酔・全身管理、手術室の運営・管理、集中治療部での患者管理・運営、ペインクリニックにおける疼痛管理、癌末期の緩和ケア、救急蘇生等、その領域は非常に広範である。麻酔は、安全に行うことが第一の条件であり、理論的な生理学、薬理学の知識とバイタルサイン等のモニタリングを含む実践的な経験が大切とされている。ここでは、理学療法士が知っておくべき、麻酔科学に関する項目について講義を行う。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目の促進	食品栄養学	<p>人は、生命を維持するため、食物を介して栄養素を摂取している。栄養素をどれだけ摂取したらよいか、どんな食品にどんな栄養素が含まれているか、さらに食品成分が組織や細胞の中でどのようにその機能を発揮するのかを知ることは重要である。各栄養素の消化・吸収・代謝などの基礎事項を中心に、生活習慣病の予防や健康の維持増進への影響にも触れる。</p>	
	臨床生理学	<p>理学療法士は患者の訴えから情報を収集、問題点を抽出した後、その病態を的確に分析することが重要である。本科目では、患者の様々な症状のメカニズムを臨床生理学的に講義する。</p> <p>具体的には、全身倦怠、発熱、頭痛、痙攣、意識障害、めまい、しびれ、運動麻痺、咳・痰、呼吸困難、嘔吐、腹痛、下痢、便秘、関節痛、腰痛をテーマとして取り上げる。本講義は、適切な理学療法評価・プログラム作成の重要な基礎的知識になると考えている。</p>	
	医学推計学	<p>医学推計学を学ぶ上で大切なことは、医学の分野における現象を科学的に把握する方法を身に付けることである。そのため、疾病の分布、発生原因を研究する疫学的アプローチに習熟し、基礎的な知識と技術について、特に率の計算、比較、統計処理などについて理解を深める。多様な研究デザインの利点と欠点を理解し、実験計画をたてることや医学的論文を批判的に読むことを練習する。</p> <p>また、疫学研究で避けられない「偏り(バイアス)の扱い」「疫学手法の臨床への応用」「サーベイランス」など今日的な課題を理解できるようにする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	リハビリテーション概論	リハビリテーションの定義、歴史、理念および障害の分類について講義する。障害の分類では、現在の国際生活機能分類だけでなく、理学療法評価での問題点の捉え方として用いられている国際障害分類についても詳細に講義する。また、リハビリテーションチームの役割と、医療機関で行われている医学的リハビリテーションの具体的方法と、社会や地域を含めた包括的なリハビリテーションの概念と具体的方法も講義する。また、医療・福祉・保健領域におけるチーム医療の重要性と関連職種の業務内容についても解説し、理学療法士の役割を明確に理解させる。	
	保健医療福祉概論	理学療法士は病院などの医療施設だけでなく、介護老人保健施設・特別養護老人ホームなどの福祉施設、保健所・保健センターなどの保健施設のように大変広い分野で活躍している。本科目では、医療・福祉・保健の各制度の歴史的背景やその具体的な内容を講義する。医療・福祉・保健の各領域における関連性を理解することで、理学療法士が患者へ適切なサービスが提供できることを視野に入れて出来るだけ具体的に解説する。	
	理学療法概論	理学療法概論では、「理学療法学とはどういったものか」について、その導入部分を講義する。具体的な内容として、理学療法の目的、歴史的背景、理学療法評価の方法、理学療法評価によって導きだされた問題点に対する運動療法や物理療法の適応とその具体的な方法を理解することを目標とする。	
	運動療法概論	本科目ではまず、運動療法の目的、歴史的背景、および具体的な運動療法の適応とその方法について講義する。次に、運動療法の基礎技術である関節可動域の維持・拡大のための運動療法、筋力の維持・増強のための運動療法について講義する。関節可動域の維持・拡大のための運動療法については、関節運動学を理解したうえで可動域を拡大させる方法や、筋の機能解剖に対する理解を深めながら、筋の伸張方法につい	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門理学療育科法目学		<p>て講義する。また、筋力維持・強化のための運動療法では、疾患に起因する病態を把握したうえで、適応となる筋力の維持・強化方法を講義する。具体的には、筋の収縮様態・抵抗の種類・非荷重もしくは荷重位といったように、どの方法を選択することで最適となるのかについて理解できることを目的とする。</p>	
	運動療法概論	<p>運動療法概論 では、神経生理学的アプローチといわれる、運動療法のなかでも特殊なテクニックを用いた運動療法について中心に講義をおこなう。講義を理解するにあたり神経生理学の復習も兼ねておこなうが、講義の具体的な内容としては、運動器疾患や中枢神経疾患に広く用いられている「固有受容性神経筋促通法」、中枢神経疾患の運動療法として用いられている「ボバース概念」によるアプローチの理論的背景と実際の方法について講義する。</p>	
	運動療法概論実習	<p>ここでは、運動療法概論 ・ で習得した運動療法を学生同士で実習する。実習では、単に模倣レベルで運動療法技術をおこなうのではなく、教員の指導により、理学療法士に必要な患者様への手の触れ方や理学療法士自身の身体の使い方を習熟させる。そして、運動療法をおこなうことによって身体に生じる変化を体験することを目的とする。</p>	
	日常生活活動学	<p>理学療法の最終目標は、「日常生活の自立」である。日常生活活動の定義・分類・評価について講義する。本科目では、解剖学かつ運動学を根拠とした基本動作の理解と基本動作と各固有動作が連続することによって成立する身の回り動作の動作構造の把握を基本とする。特に評価については、本学では一貫してトップダウン評価を重要視するが、この評価方法ではそれぞれの患者様が障害されている日常生活動作に関連する基本動作を把握し、その動作特徴から問題点を把握することが重要である。さらに、実際の症例のケースを基にした各動作の実例を提示して観察と評価、最良の動作方法の立案を行い、その有効性について実技も踏まえてこれらの具体的な方法論を講義する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	基礎 動作分析学	理学療法評価では、動作を分析できる能力が必要である。特に本学で推奨しているトップダウン評価を行う際には患者が問題となる日常生活動作に関連する基本動作から機能障害を導くことが必要になる。本科目では、患者の基本動作を分析する前段階として、健常者の基本動作の動作分析ができることを目標とする。具体的には、健常者の動作を解剖学・運動学用語を用いて適切に表現（記述）し、健常者における動作特徴を分析することを目標にする。この科目を通して、疾患別の理学療法評価でおこなう能力障害と機能障害の関連性（関連図）を導くための導入とする。	
	理 学 療 育 法 目 学 感染管理学	病院や介護老人保健施設における感染防止技術や感染管理方法についての基礎知識を修得することを目的に、以下の事項について講義する。 (1) 院内における病原微生物の感染様式 (2) 細菌検査（手指、治療室、治療器具） (3) 院内器具・機器の洗浄と消毒・滅菌 (4) 院内の清掃と廃棄物の処理 (5) 感染防止 (6) 賠償責任など	
	法 目 学 安全管理学	医療事故の発生は後をたたない。その社会的背景と医療現場の現状を確認した上で、医療事故（アクシデント）や医療事故に結びつく可能性のある事象（インシデント）が、なぜ起こるのかを、具体的な事例の分析と評価を通じて考察する。また、医療事故防止の取り組みの実際や、発生した場合の対応、医療従事者間の連携等について理解し、組織的に事故を抑止するための安全管理のあり方を学ぶ。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	理学 評価学総論	理学療法評価の目的、理学療法評価の全体的な流れについて講義する。トップダウン評価とボトムアップ評価に大別される2つの評価方法について、各々の特徴と方法とを講義する。さらに、本学が推奨するトップダウン評価でおこなう、「問診から患者様が障害されている日常生活動作に関連する基本動作を把握し、その動作特徴から問題点を把握する」という方法について具体的に解説する。また、動作特徴から導き出される問題点の検証手段として必要となる各種の理学療法検査および測定の概要についても解説し、一連の理学療法評価における検査・測定の位置づけについても講義する。	
	療 法 育 評	各疾患における理学療法評価について講義する。理学療法臨床実習で経験することの多い上肢・下肢の骨関節疾患、脳血管障害片麻痺を対象としてトップダウン評価の一連の流れを学習する。下肢の骨関節疾患では股関節や膝関節の手術後の患者様について、クリティカルパスを考慮した評価が展開できるように学習を進めていく。また上肢の疾患においても基本動作のみならず単関節の運動の観察・分析をもとにトップダウン評価が実施できるように授業を展開する。	
	科 目 学	評価学実習	評価学総論の内容に関する実習をおこなう。具体的には、トップダウン評価において最初におこなう「問診」を、学生同士および本学附属診療所にて患者様のご協力を得て実習する。さらに、患者様の動作のビデオ教材を用いて、動作分析学で習得した方法による基本動作の把握と動作特徴からの問題点の把握をおこなう。特に高い動作観察能力を養うことはトップダウン評価において重要であることから、患者様の動作を運動学的用語を用いて文章化する能力を習得させて行く。さらに観察した動作から患者様の機能的な問題点を導き出すための「関連図」を作成し、必要となる検査項目を抽出するまでの段階を演習形式で学習し評価学総論の内容についての理解を深める。

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	理学療法	評価学実習	
	理学療法	検査測定学	
	理学療法	骨関節疾患理学療法学	
		<p>評価学総論 の内容に関する実習をおこなう。上肢・下肢の骨関節疾患、脳血管障害片麻痺に関するビデオ教材を用い、レポート作成を目標とした演習形式での授業を展開して行きたいと考えている。また、本学附属診療所の患者様にご協力いただき、臨床場面において動作観察・動作分析から問題点の抽出に至るまでのトップダウン評価を実施する。運動器疾患の評価では、下肢の疾患における免荷時期や上肢の疾患における単関節運動の観察・分析をもとにしたトップダウン評価なども実施し、各々の疾患に特有な評価の考え方を講義する。</p>	
		<p>理学療法評価で用いる検査測定について実技演習を多く取り入れながら講義する。具体的な検査測定項目は、四肢長・周径、関節可動域検査、徒手筋力検査、感覚検査、反射検査である。まず、理学療法評価の中では適切な検査を選択できるようになるための基礎知識を得ることが必要であることから、各検査が持つ意義や目的についての解説を行う。さらに各々の検査測定の実施手順や検査器具の正しい使用方法を習得し、様々な注意事項に留意しながら正確な検査測定結果を導き出せる能力を身につける。最終的には本授業のなかで学生が全検査を習得できるようにし、実技テストにて習得度を確認する。</p>	
		<p>上肢の骨関節疾患患者に対して適切な理学療法をおこなうための、理学療法評価と理学療法技術について講義する。まず、理学療法をおこなううえで、疾患に起因する病態や術式などについて理解し、理学療法評価や理学療法に反映できるように講義する。次に、理学療法評価では、評価学総論、評価学実習で習得したトップダウン評価の知識をもとに、さらに詳細に評価ができるように講義する。理学療法技術では、運動療法概論で習得した理学療法基礎技術をもとに、上肢の骨関節疾患特有の理学療法技術を講義する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 療 法 育 治 科 目	理学	骨関節疾患理学療法学	下肢の骨関節疾患患者に対して適切な理学療法をおこなうための、理学療法評価と理学療法技術について講義する。まず、理学療法をおこなううえで、疾患に起因する病態や術式などについて理解し、理学療法評価や理学療法に反映できるように講義する。次に、理学療法評価では、評価学総論、評価学実習で習得したトップダウン評価の知識をもとに、さらに詳細に評価ができるように講義する。理学療法技術では、運動療法概論で習得した理学療法基礎技術をもとに、下肢の骨関節疾患特有の理学療法技術を講義する。	
	療	骨関節疾患理学療法学	体幹・頸部の骨関節疾患患者に対して適切な理学療法をおこなうための、理学療法評価と理学療法技術について講義する。まず、理学療法をおこなううえで、疾患に起因する病態や術式などについて理解し、理学療法評価や理学療法に反映できるように講義する。次に、理学療法評価では、評価学総論、評価学実習で習得したトップダウン評価の知識をもとに、さらに詳細に評価ができるように講義する。理学療法技術では、運動療法概論で習得した理学療法基礎技術をもとに、体幹・頸部の骨関節疾患特有の理学療法技術を講義する。	
	法	脳血管障害理学療法学	脳血管障害患者に対する理学療法評価・技術を習得するために必要な病態について講義する。具体的には、脳血管障害により生じる片麻痺の神経生理学的メカニズムと、片麻痺としての運動障害、感覚障害を講義する。具体的には、運動障害の要素である痙縮、連合反応、病的共同運動の理解と各々の関連性を解説する。運動障害を理解するうえで、筋緊張の理解は重要である。筋緊張評価について実技を含めて詳細に講義する。感覚障害では表在感覚、深部感覚と感覚障害が運動機能に与える影響について講義する。また、高次脳機能障害の病態と、その評価方法についても講義する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	脳血管障害理学療法学	<p>脳血管障害患者に対する理学療法評価の具体的な方法について講義する。動作分析学、評価学総論、評価学実習で習得したトップダウン評価の知識をもとに、脳血管障害片麻痺患者の詳細な評価ができるように講義する。特に、問診内容から問題となる基本動作の把握とその動作分析をすることで、能力障害と機能障害との関連性である関連図の作成が明確にできるように講義する。また、関連図の作成により、適切な理学療法プログラムを作成して、理学療法目標を設定できることを目的とする。</p>	
	脳血管障害理学療法学	<p>脳血管障害理学療法学、の知識を基礎として、本科目では脳血管障害患者に対する理学療法技術について講義する。運動療法概論で習得した理学療法基礎技術を基本として、運動障害・感覚障害へのアプローチを講義する。運動障害へのアプローチとして、痙縮などから出現する筋緊張異常に対する理学療法について詳細に解説する。感覚障害へのアプローチでは、感覚鈍麻に対しては正常感覚を促通する方法や感覚過敏に対しての脱感作療法を解説する。高次脳機能障害への理学療法アプローチについても講義する。</p> <p>本学で開発した動作学習の方法である臨床動作促通法を学習させるとともに、本疾患への神経生理学的アプローチの適応についても解説する。</p>	
	神経筋疾患理学療法学	<p>神経筋疾患のなかで脳血管障害以外の疾患の病態把握と理学療法評価を講義する。具体的には、理学療法で良く経験する変性疾患であるパーキンソン病・脊髄小脳変性症・筋萎縮性側索硬化症、脱髄疾患である多発性硬化症、末梢神経疾患であるギランバレー症候群・慢性炎症性脱髄性多発神経炎などの末梢神経疾患である。本科目では、各疾患特有の動作を分析し問題点を明確に把握できることを目的としているために、理学療法評価に重点をおいて講義する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
理学療法治療学	神経筋疾患理学療法学	<p>神経筋疾患理学療法学 で学習した、神経筋疾患の病態把握と理学療法評価をもとにして、理学療法技術について講義する。具体的には、運動療法概論で習得した理学療法基礎技術を基にして、運動障害に対する運動療法、感覚障害に対する運動療法、高次脳機能障害に対する運動療法、そして動作獲得を目的とした運動療法を講義する。特殊テクニックである神経生理学的アプローチの、各疾患への適応についても解説する。また、神経疾患に対する物理療法についても講義する。</p>	
	小児疾患理学療法学	<p>【渡邊 裕文担当】(7.5回) 小児疾患のなかでも運動発達障害をみとめる脳性麻痺の病態把握と理学療法評価を講義する。具体的には、痙直型・アテトーゼ型・弛緩型の脳性麻痺の動作特徴を講義し、その動作分析から問題点を明確に把握することを目標とする。</p> <p>【大沼 俊博担当】(7.5回) 運動療法概論で習得した理学療法基礎技術をもとにして、脳性麻痺の各タイプにともなう運動療法を講義・実習する。特に、脳性麻痺特有な異常筋緊張に対するアプローチについて詳細に解説する。</p>	オムニバス方式
	小児疾患理学療法学	<p>脳性麻痺の代表的な理学療法である、神経生理学的アプローチの臨床応用について教授する。</p> <p>【吉田 琢哉担当】(7.5回) 神経生理学的アプローチであるボイタ法を用いた脳性麻痺への運動療法の実際について講義する。ボイタ法の内容から考えられる正常発達の考え方、脳性麻痺の捉え方について講義・実習をおこなう。</p> <p>【馬場先 俊仁担当】(7.5回) 神経生理学的アプローチであるポバース概念を用いた脳性麻痺への運動療法の実際について講義する。ポバース概念を用いた脳性麻痺の捉え方について講義・実習をおこなう。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門療育科 理学療法	脊髄損傷理学療法	脊髄疾患患者に対して適切な理学療法をおこなうための理学療法評価と理学療法技術について講義する。特に脊髄損傷患者の理学療法では、残存機能によって遂行可能な日常生活動作が決定されるため、その把握と適切な理学療法評価をおこなうことを目標とする。理学療法技術では、運動療法概論で習得した理学療法基礎技術を基に、脊髄疾患へのアプローチの方法を講義する。	
	老人理学療法	老人には運動器疾患、神経筋疾患、内部障害を重複して認めることが多い。また、認知症を認める場合もある。つまり、その問題点の抽出に当たっては運動学、動作分析学、日常生活活動学などの見地から、より高度な評価技術が求められる。本科目では、老人における各疾患の病態の理解を基に、複合疾患に起因する障害の日常生活活動への関与と認知症に対する理学療法の効果・関連を、多くの実例を踏まえながら様々な観点からの理学療法評価の具体的な方法とそのアプローチについて講義する。また、最終的な目標を在宅生活と定め、障害を有する老人が継続的に在宅生活を送るための家屋改造や各種介護器具に対する理解も深めることとする。	
	内部障害理学療法	理学療法の対象となる多くの疾患では、内部障害といわれる呼吸・循環障害、糖尿病などの代謝障害、生命維持に不可欠の摂食嚥下障害を有することがある。そのため、理学療法士にとって内部障害を理解することは非常に重要である。本科目では、これらの障害の病理と病態、生化学的検査データの理解を踏まえた上で、呼吸・循環、代謝、摂食嚥下等の各障害に対する理学療法評価および理学療法技術について実技も含めて講義する。特に理学療法評価では、呼吸機能検査や心電図検査など理学療法士にとって呼吸・循環障害を評価するために重要な検査について習得することも目標とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 理 学 療 育 科 目	義肢装具学	<p>障害者にとって、義肢装具の活用も日常生活復帰への重要な手段である。その使用については、頸随損傷などの第一義的に用いる場合と骨関節および中枢疾患などのように運動療法の補完として用いる場合がある。そこで、前者に対しては対応となる義肢装具の紹介とその目的ならびに使用方法を教授する。後者に対しては、義肢装具を生活自立への第一義的な目的とするのではなく、あくまで運動療法と義肢装具の相互補完によって本来の目的である患者固有の能力を高め、真の意味での日常生活活動の自立を目指すことを基本コンセプトとする。従って、本科目では各種装具の基本構造や目的の理解を深めるとともに、装具と運動療法の一連の相互補完作用が有効に機能するための障害の変化に対応した処方と処方時期の理解を求めることとする。</p>	
	義肢装具学実習	<p>義肢装具学で習得した内容を基に実習を行う。本科目では、既成の義肢装具にとらわれることなく、本学のコンセプトである「トップダウン評価」によって抽出した問題点に対する運動療法を補完しうる義肢装具を理学療法士自らが設計・開発・製作できる能力を身に付けることを目標とする。具体的には、1) 義肢装具製作に必要な素材に関する知識の習得、2) 基本的な製作技術習得のための代表的な装具の作成、3) 臨床例を基にした評価から装具の開発・設計までの一連の装具製作などを行う。特に、3) では製作根拠やその利点などに関するプレゼンテーションを実施する。</p>	
	物理療法学	<p>物理療法は運動療法とともに理学療法における重要な治療法である。物理療法は温熱療法、寒冷療法、電気治療、水治療法、牽引療法などに大別され、臨床ではそれぞれがさらに細分化されて様々な治療方法が用いられている。これらは正しい理論や使用方法を理解することで運動療法同様に大きな治療効果を期待できるものである。まず本講義においては、それぞれの物理療法の目的、種類、適応と禁忌、具体的な方法について講義し、各治療方法についての理論的背景を十分理解する。その上でさらに「物理療法学実習」を展開し、実技演習の中で理解度を深めていく。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	理学 物理療法学実習	物理療法学で習得した内容の実習をおこなう。実際に機器を操作することで、物理療法に習熟することを目的とする。治療目的に応じた刺激内容の変化を実習で確認する。学生同士での物理療法機器を用いた実習のなかで、刺激前後での生体反応の変化を学習することで、物理療法機器の特徴、治療効果、禁忌などのリスク管理を解説する。これらの学習を通して、物理療法と他の治療法との関連性を具体的に指導する。	
	療法 法 治 療 学 総合理学療法学	理学療法臨床実習 の開始前に、本学学生に不十分である臨床実習に必要な知識、技術を再度習得させる。 【三好裕子担当】(9回) 理学療法評価実習、理学療法臨床実習 で臨床実習指導者から指摘された事項を講義・実習をおこなう。特に、疾患の理解、理学療法評価の具体的方法に関しては、詳細に指導する。また、実習中の毎日の記録であるデイリーノートやレポートの書き方についても再度指導をおこなう。 【三原 修、辻尾厚司、中村昌司担当】(各2回) 本科目開講前に行われた臨床評価実習、理学療法臨床実習での実際に臨床実習指導者を担当していただいた先生方から、本学学生に不足している知識・技術および情意面での注意事項を中心に講義いただく。 本科目を通して、理学療法臨床実習 ・ が円滑に実施できることを目的とする。	オムニバス方式
	地域 理学療法 学 地域理学療法学総論	近年、病院やクリニックなどの医療現場以外においても理学療法士の活躍が期待されている。本科目では、地域理学療法を学習する基礎として保健・医療・福祉の動向を解説し、地域理学療法の計画立案、評価や各関連職種との連携を解説する。また、介護老人保健施設・特別養護老人ホームなどの施設での理学療法、施設における通所リハビリテーションサービスにおける理学療法、家庭訪問による在宅での理学療法、保健所や保健センターなどの地域での理学療法の具体的方法を講義する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 教 育 地 域 理 学 療 法 学	地域理学療法学各論	<p>地域でのリハビリテーションを実践している理学療法士の先生方に、臨床での実践について講義していただく。</p> <p>【蔦谷 星子担当】(10回) 訪問看護ステーションからの訪問リハビリテーションにおける理学療法士の役割と活動内容を講義する。訪問看護ステーションへの理学療法士の関わりを通して、訪問看護師と連携しての訪問リハビリテーションの重要性を講義する。</p> <p>【田中 健司担当】(10回) 保健センターでの理学療法士の役割と活動内容を講義する。保健センターでは、保健師、事務職員との関わりが大切であり、理学療法士としての他職種とのかかわり方についても学習する。</p> <p>【守安久尚担当】(10回) 病院からの介護保険を用いての訪問リハビリテーションの役割と活動内容を講義する。介護保険のシステムと、訪問リハビリテーション実施に必要なケアプランを作成する介護支援専門員と連携することの重要性を講義する。</p> <p>学生の、地域リハビリテーションに対する理解を深めることを目標とする。</p>	オムニバス方式
科目	臨床評価実習	<p>臨床評価実習は、病院施設において3週間の実習期間で実施する。学内教育で習得したトップダウン評価を臨床場面で実際の患者様に実施する。実際に患者様の症状を評価することによって、動作分析の考え方や具体的な検査測定技術を習得し理学療法評価を円滑に行われることを目標にする。3週間の実習期間内に理学療法評価を習得することは非常に難渋するため、多くの症例を評価させるのではなく、運動器疾患、神経疾患についてそれぞれ1症例ずつ的確に評価できることを目標にする。臨床評価実習終了後には、学内で臨床評価実習セミナーをおこない、学生が本実習で習得したことを担当症例の症例報告発表として報告させる。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育実習科目	理学療法臨床実習	<p>理学療法臨床実習 は病院施設において8週間の実習期間で実施する。本実習の前に実施した臨床評価実習でおこなったトップダウン評価を出来るだけ多くの症例で再現することを目標にする。最低でも、運動器疾患、神経疾患についてそれぞれ3症例ずつ的確に評価できることを目標にする。理学療法臨床実習 では理学療法評価と模倣レベルの理学療法をおこなうため、理学療法臨床実習 では理学療法評価、理学療法目標、理学療法プログラムの作成までをおこなわせることを目標にする。本実習で学生が得た知識・技術は理学療法臨床セミナーで報告させる。</p>	
	理学療法臨床実習	<p>理学療法臨床実習 は、病院施設において8週間の実習期間で実施する。理学療法評価から理学療法プログラムの作成、そして、模倣レベルでの理学療法が実施できることを目標にする。運動器疾患、神経疾患についてそれぞれ2症例ずつの理学療法を実施させ、この効果を確認させることを目標にする。具体的には、症例の理学療法評価と理学療法プログラムを作成と、数週間の理学療法実施の後に再評価をおこない理学療法効果を確認する。病院施設でおこなう最後の理学療法臨床実習であるために医学的リハビリテーションの全体像を把握することも目標とする。本実習で得られた知識・技術を担当症例の症例報告発表として報告させる。</p>	
	理学療法臨床実習	<p>臨床評価実習、理学療法臨床実習 ・ は病院施設での臨床実習であったが、理学療法臨床実習 では病院施設以外で理学療法士の活躍が期待できる施設での臨床実習をおこなう。実習期間は理学療法臨床実習 ・ と同様に8週間とし、具体的な臨床実習施設としては、診療所、小児施設、介護老人保健施設、特別養護老人ホーム、保健センター、在宅支援事業所である。これまでの実習で得られた知識・技術をもとにして、病院施設以外で理学療法士がどのように働いているかを知ること、様々な施設での理学療法の特徴を習得することを目標とする。実習終了後には、学生に本実習で得られた知識・技術を担当症例の症例報告発表として報告させ、様々な施設の理学療法の特徴を学生に理解させる。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	理学療法臨床セミナー	理学療法臨床実習 と理学療法臨床実習 の間に、理学療法臨床セミナーを設定する。理学療法評価実習、理学療法臨床実習 の期間に生じた学生自身の疑問点や、理学療法評価における具体的な問題点について、教員が直接講義・実習することで問題点を解決させることを目標とする。具体的には、理学療法臨床実習 で担当した症例のなかから2症例を学生に症例報告発表させ、発表内容から教員がテーマを決めて講義・実習をおこなわせる。理学療法臨床セミナーにより得られた実習に関連する知識・技術の向上により、セミナー終了後におこなう理学療法臨床実習 ・ が円滑におこなわせることが可能になると考えている。	
	東洋医学概論	東洋医学の基礎的知識について講義する。また、「東洋医学と理学療法特論」で講義する経穴刺激理学療法の知識として必要な、経穴に関する講義・実習をおこなう。経穴は身体部位の状況を把握する反応点であり、各内臓器官に連結する経絡に沿って並び、その数は361種類ある。本科目では、上肢・下肢・体幹の代表的な経穴について正確に取穴できることを目標とする。 【谷 万喜子担当】(7回) 経穴の意義と取穴法の基本概念の講義と上肢に分布する経穴・経絡に関する講義・実習をおこなう。 【高田 あや担当】(4回) 下肢に分布する経穴・経絡に関する講義・実習をおこなう。 【井上 博紀担当】(4回) 体幹に分布する経穴・経絡に関する講義・実習をおこなう。	オムニバス方式
	東洋医学と理学療法特論	東洋医学、特に鍼灸医学と理学療法を融合して本学で開発した、経穴刺激理学療法の理論と具体的な方法について講義・実習をおこなう。また、東洋医学と理学療法を融合した研究報告をまとめるとともに将来の展望についても講義する。 【鈴木 俊明担当】(7回) 経穴刺激理学療法の意義と基本概念について解説する。神経疾患に用いた経穴刺激理学療法の臨床応用について講義する。	オムニバス方式

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目		<p>【谷 万喜子担当】(4回) 体幹・下肢に機能障害を認める運動器疾患に対する経穴刺激理学療法の臨床応用について講義する。</p> <p>【高田 あや担当】(2回) 上肢に機能障害を認める運動器疾患に対する経穴刺激理学療法の臨床応用について講義する。</p> <p>【福島 綾子担当】(2回) スポーツ障害に対する経穴刺激理学療法の臨床応用について講義する。</p>	
	神経難病理学療法特論	<p>【鈴木 俊明担当】(5回) 神経筋疾患理学療法学 で教授した神経難病であるパーキンソン病、脊髄小脳変性症、筋萎縮性側索硬化症のほか、スモン病、ジストニアなどに対する理学療法について、特殊テクニックを中心に講義・実習する。また、神経疾患患者の理学療法において、本学で開発した動作誘導法である臨床動作促通法の理論と実際についても教授する。</p> <p>【後藤 淳担当】(5回) 神経難病患者で理学療法をおこなう機会が多い、パーキンソン病・脊髄小脳変性症に限定した運動療法の実際や在宅でのリハビリテーションアプローチも総合して講義する。</p> <p>【手塚 康貴担当】(5回) 神経疾患のなかで脳血管障害の麻痺側上肢機能の回復は非常に困難である。脳血管障害の麻痺側上肢機能に対するアプローチであるミラーセラピーについて講義する。</p>	オムニバス方式
	精神疾患理学療法特論	<p>本邦における精神疾患に対するリハビリテーションとして、従来、必要性の観点からも法制的見地からも作業療法の需要は高かったが、理学療法に対しては十分な門戸が開かれていたとはいえない。本講義では、統合失調症などの従来型の器質性精神疾患のみならず、近年注目されているパニック障害や抑鬱障害等に対する理学療法のあり方について最新の知見を踏まえて講義する。特に、今後ますます増加すると考えられる認知症に対して、その病態の理解とともに理学療法や同疾患への運動療法の効果についても講義・実習する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教展育科	スポーツ理学療法特論	<p>【谷埜予士次・吉田隆紀担当】(計7回)</p> <p>本科目では、スポーツ領域での理学療法について講義・実習する。スポーツ動作は理学療法の対象となる基本動作の発展系となるため、講義・実習に先立ってスポーツの基本動作(構え・走・方向転換・跳躍動作など)について理解または体験する。また、スポーツ選手の個体的・環境的およびトレーニング要因を考慮することの重要性を理解するとともに、代表的なスポーツ外傷を取り上げて、受傷機転の理解、スポーツ動作の分析と問題点の把握や再発予防に関するポイントと具体的な理学療法の方法を本学の研究データとともに教授する。</p> <p>【大工谷新一担当】(4回)</p> <p>スポーツ選手の競技復帰を早期に実現するためには、将来的に生じる可能性のある問題点を前もって予測しておく必要がある。例えば、下肢の運動器疾患において、免荷時期に荷重時期の問題点を予測することが大切である。この予測する新しい方法であるD testを解説する。</p> <p>【三浦雄一郎担当】(4回)</p> <p>スポーツ選手に大変よくみられる腰痛症の理学療法について科学的データを含めて紹介する。</p>	オムニバス方式
科目目	基礎ゼミ	<p>本科目では、臨床に必要な車椅子や杖などの実践や補装具を用いた起居・移動などの障害体験とその介助を通して、患者心理を理解するとともに理学療法士にとって必要な各種補装具の操作および使用方法と介助方法の体験・習得を目標とする。また、理学療法は患者様に対するサービス提供の一環であるという観点と基礎ゼミの受講を踏まえて、顧客サービスの観点に立脚した接遇についての教授・実習を行う。具体的には、患者様に接する際の理学療法士としての基本的な姿勢や問診に必要な面談方法について、講義を行うとともに臨床事例を基にした問診のロールプレイングを行うこととする。また、学外見学として先進的かつ専門領域のリハビリテーション施設等の見学を行うことにより、より明確な将来的ビジョンを持つための一助とする。これらの諸項目を実施し、今後の学習に対する動機づけを高めることを目標とする。</p>	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	基礎ゼミ	<p>本学附属診療所にて実施する。理学療法士の治療見学にとどまらず、基礎ゼミで教授した内容の実践を行う。具体的には、実際に患者様に対して問診を行うことによって、理学療法士にとって重要となる患者様への接し方を実践する。同時に、患者様の主訴やニーズを適切に汲み取れることを目標とし、聴取した問診内容についてはレポートを課し、適切な根拠を常に求める習慣付けを体得させる。さらに、以上の一連の問診技術を習得することによって、理学療法概論で講義するトップダウン評価を理解するための入門になることを期待する。また、医療スタッフとの連携による医療現場でのリハビリテーションの流れについても学ぶことによって、理学療法士に必要な資質を獲得させ、学習に対する動機づけをおこなう。</p>	
	理学療法研究法	<p>理学療法研究は理学療法の発展のために必須である。理学療法は技術先行で発展してきた学問と考えられ、日常行われている理学療法技術に対する効果についても客観的に示されているものはまだまだ十分とは考えられない。あらためて理学療法の効果を客観的に実証していくことは大変重要な作業となる。本科目では理学療法領域での研究方法を講義する。教員の指導に基づき、研究計画の立案と実験をおこない、その結果を考察する。研究成果は学内報告会にて発表させる予定である。</p>	